

## エマソン思想における汎神論的要素をめぐって 透谷との関連を中心に

著者	許 培寛
雑誌名	文学研究論集
号	15
ページ	158(125)-172(111)
発行年	1998-03-19
その他のタイトル	Pan-theistic Elements in Emerson : The Relationship between Tokoku and Emerson
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/14071">http://hdl.handle.net/2241/14071</a>

# エマソン思想における汎神論的要素をめぐって

——透谷との関連を中心に——

許 培 寛

## 1 はじめに

透谷とエマソンは、共にプロテスタンティズムの影響を受けた作家として共通点が多い。たとえば、透谷はミナと結婚する時、プロテスタント派の教寄屋橋教会で洗礼を受け、それ以来、キリスト教活動（外国人牧師の通訳兼布教書翻訳）に参加した。またエマソンの場合は、十八才でハーバード大学を卒業し、二十六才で、これもプロテスタント派のボストン第二教会の牧師になり、二十九才で牧師の職を辞任した。両者の共通点は、たんに同じ宗派に属したというだけではなく、やがてキリスト教に対する批判を抱くようになったということも共通している。そのために、ふたりは共に教団からは異端視され、やがて追放された点でも共通している。しかし、以上をもつて二人の共通性を論じるには無理がある。あくまでも二人の個性が教会に対していかなる姿勢をとったのか、そしてその結果、いかなる思想を形成するようになったのかをたどらねばならない。このような意図を究明するかたちで、本稿は二人のキリスト教に対する認識の共通性から出発しなければならない。

これまでの研究をみると、確かに、透谷における「内部生命」、エマソンの「大霊」がそれぞれの宗教観の核心にあつて、そこになんらかの共通性がみとめられることは間違いない。しかしこのような、それぞれの思想の中核的概念を、あらためてそれぞれの思想の文脈に還元してその意味内容を捉え直すことで、透谷にとつてのエマソンの思想の影響を比較検討する必要がさらにあるのだが、これまでの透谷研究においては、そのような考察はほとんどなかったと言つていいだろう。その背景には、エマソンの宗教観を透谷研究の立場から分析するといった視座が欠けていたからと考えられる。

本稿は、二人の宗教観の共通性の背景に東洋の宗教が媒介をなしていると信ずる。そこで方法としては、二人の宗教活

動とかからの主要な作品に現れた宗教観を分析し、エマソンの「大霊」に関する思索が、透谷の「内部生命」論とどのようにかかわっているのかをあきらかにしようと試みることにする。

ただ本稿の筆者は、前号の論考で透谷のキリスト教批判に関する検証はおこなっておいいたので、本稿では、その続編として、エマソンの「大霊」に関する思索を、彼のキリスト教批判という思想的文脈のなかにとらえることをひとまず主題とし、最後に透谷の「内部生命」への影響に及んでゆくことにする。

## 2 キリスト教に対する批判精神

透谷の入信が、西欧（欧米）の近代的な宗教・思想に惹かれた明治期の青年にありがちな、即興的なものであったことは周知のことである。しかし、自己の信ずる理想あるいは思想・宗教観との深刻な違いから、やがて自由民権運動から離脱するに至った透谷にとって、そのことによって、同志の友を裏切った者としての自責感は長くかれを苦しめ、憂鬱症に陥り、それが結局は精神分裂症にまで悪化し、やがて自殺に追い込まれていったと考えられる。しかし結婚当時の透谷は、キリスト教が深刻な政治的・思想的な葛藤に苦悩していた彼自身を絶望から救ってくれるだろうと信じていたことは確かである。それは、初期の彼のキリスト教関係の一連の評論文がキリスト教に対して好意的であったことをみてもわかる。透谷は、キリスト教雑誌『平和』に定期的に評論や教団布教関係の記事を書いていたが、後期になると、その評論の論調は、初期の記事の内容と正反対のものとなってゆき、当時日本で布教していた西洋の宣教師に対する批判とキリスト教団および聖書解釈に対する批判をこめる論調が目立つようになってゆく。その結果、透谷は雑誌『平和』の編集から解雇されてしまった。そのことは前号の論考で考察したところである。

それに対して、エマソンの場合はどうだったのか。最初の妻エレンを結婚二年にして肺結核で亡くし、奉職した教会では、伝統であった儀式を否定したため免職になった。<sup>2</sup> 免職は後述するように、彼の抱懐する神学が異端視され、教団にとって有害な人物として排除されたからであった。その後エマソンはその思想の傾向からと思われるが、東洋の思想に眼を向けるようになったと考えられる。この彼の思想の軌跡をたどることが本稿の主題となる。すでにふれたように、エマソンが眼をむけた東洋の思想が、東アジア地域に属する日本の近代初期にも思想として生き続けていたのであって、その

伝統思想がキリスト教神学に賛仰と懷疑を抱いて彷徨する明治期の青年知識人北村透谷にやがて深い影響を与えるようになったからである。したがって、本稿の主題をさらに限定すれば、エマソンの東洋の思想との邂逅に焦点を当てるところにある。東洋の思想を媒介に二人の思想の影響関係を考察することが有効だと考えるからである。

エマソンは、一八二九年に正式にボストン第二教会の牧師に任命され、それを機に九月には、エレン・タッカーと結婚した。ただ牧師に任命された当初から、彼の神学は教会から異端視されるような独自の方向性をはらんでいた。たとえば、その頃の日記には、次のように告白されている。

宗教には、かならず、崇高さが伴うのではなからうか。礼拝堂へ下りてゆくと、平凡な数人の人々がいるが、彼等は、飲食のためや、金もうけのためや、娯楽のために集まっているのではなくて、偉大な思想にひかれてくるのである。広大無辺な「神」と関係を持ち、一体にならうとして、そこへ来るのである。<sup>(3)</sup>

ここにはまだ漠然とはしているが、エマソン独自の「神」の観念がほの見えていることに注意する必要がある。「広大無辺な神」と「一体にならうとする」ということが「礼拝堂」における礼拝式（聖餐儀礼）を媒介とする限り、その「神」の観念がプロテスタンティズムの教義に背くものでないことはいうまでもなからう。しかし、この文脈にはどうも儀礼が媒介しておらず、「礼拝堂」という場がたんに神と一体化する場を提供する所と認識されているように受け取れる。つまり「礼拝堂」は聖なる儀礼の場ではなく、たんに集会場としての二次的な位置を占めるようになっていると感じられる。儀礼の媒介なしに「広大無辺な神」との一体という神学がすでにエマソンのうちに胚胎している。

エマソンにとって、「神」は文字どおり「広大無辺」な存在として、礼儀の媒介なしに普遍化しているという思想の萌芽が認められる。その場合、「神」は唯一の実在というよりも、むしろ「神性」という語で表されるような、万物の本質という意味での「普遍的な神」の方向にあるといってもよからう。彼の「神」とは一種の普遍的な神であり、そのような「広大無辺な神」への道を歩もうとして、無限の世界にあこがれてゆくというのがエマソンの思想の軌跡である。この「神」の思想を根拠にして、エマソンはこの普遍的な「神」と、いつかは自分自身が交感し得るであろうと想像しまた期待した。そのために彼は、ある講演のなかで、とくに個人の無限性を強調するようになる。やがて彼は、その日記に、

私は、いつかは個人でなくなると信じている。靈魂は絶えず『普遍的』になろうとする傾向をもち、有機体の最後の者に至るまで、活氣を与えようとしていることを私は信じている。<sup>(4)</sup>

と書くに至った。この頃エマソンは、〈普遍的な神〉という觀念の必然から、心のなかに「神」が存在すると考えはじめ、さらには、精神と物質とは相互に交感するという考えを持つようになった。その結果、人は誰でも「神」の真理を直観的に把握できると感じる。

こうして、直観の權威を認めたエマソンは、聖書を神の最終的な言葉だという信仰と、歴史的キリスト教が保持し続けてきた神に対する信仰とを捨て去る契機を醸成していった。「神」と交感し得る可能性、さらに過激な方向をとれば、人間の能動的行為において、彼自身が神になれるという可能性を想念したことの影響には、当時の浪漫的アメリカ社会という環境があったが、想念それ自体はキリスト教からすれば異端的な考えであった。彼の日記にみられるように、当時の教団に対して懐疑的であったエマソンの思想は、それが実践されるようになるまでには、時間がかかったが、それでも彼は、心の中で直接に聞いた神の声を表現しなくてはならなかった。

このようなエマソンの考え方の萌芽をはじめから危険視していたボストン第二教会の前任牧師ウェアの予測が当たったのであった。一八三一年六月になると、自身の神学に忠実に行動しようとしていたエマソンは、特定の宗教団体に加盟することは不自然だと考え、その秋には礼拝式を不用なものと思なし、牧師職さえも批判するようになった。礼拝式の否定はいうまでもなく、前述した彼の「神」の直観にもとづくものであった。そのことから必然的に、礼拝式と教会の權威によつて特権化されていた〈神の代理〉と觀念されていた牧師職への批判も派生したとみてよからう。エマソン自身それを実行するために、翌年二月には牧師職の辞任を考えるようになった。その頃の日記が当時の実情をよく現している。

私は、ときどき、立派な牧師になるためには、どうしても牧師職をやめることが必要だと考えた。この職業は、もはや時代おくれである。時代が変わっているのに、われわれは祖先の古い形式で礼拝している。ソクラテスの異教のほうが、老衰して使えないものにならないキリスト教よりもましなのではあるまいか。<sup>(5)</sup>

こうして、エマソンはホワイト・マウンテンズへ出かけ、静かな山中でこの問題を熟慮した。その頃の日記には、

山のなかでは、思想の翼を強くして、愛と知恵の静かな高みから人びとの誤りを見なければならぬ。……宗教は形式だけではなく、生命である。<sup>⑥</sup>

と書いている。そしておそらくその結論を得たのだろう、九月にボストンへ帰ると、ボストン第二教会牧師という名誉ある地位を投げ捨てた。エマソンが当時、人々に憧れ尊敬されていた牧師の職をやめる理由となった「宗教は形式だけではなく、生命である」という言葉は、かえり見て、透谷がキリスト教雑誌『平和』での執筆活動をやめた理由ときわめて類似していることに留意しておく必要があるう。

しかしここで、なぜ、エマソンがキリスト教から離れなければならなかったのかをあらためて考える必要がある。というのは、キリスト教を捨てた異端者としてのみエマソンを見るのは誤りだからである。

この驚くべき行列——霞のような蝶、彫刻のような貝、鳥、獣、魚、昆虫、蛇など、あらゆる場所に、たとえば、有機体の形を真似した岩のなかにも、未発達の状態でひそんでいる生成の原理を見物して回ると、宇宙は今までもさらに驚くべき謎のように思われてくる。あれほど奇怪な、野蛮な、美しい形のもので、すべて、見物人である人間に内在する属性の表現でないものはない。——さそりと人間の間にさえも、なにか神秘的な関係がある。私は自分のなかにむかでが住むのを感じる。——南米のわにが、鯉が、鷲が、狐がいるのを感じる。私は不思議な共感に動かされる。<sup>⑦</sup>

この文章は、エマソンがヨーロッパ旅行中、パリの植物園で受けた靈感を記しとどめたものである。ここからも彼がキリスト教の主張する一神論的な考えに反対であったことがわかる。この靈感からは端的に、この世に存在する全てのものに「神」が内在するとエマソンは直観している。彼の著書、すなわち超絶主義クラブの聖書と言われた、彼の処女作『自然論』のなかでも、キリスト教会を批判して自然界の奥に「神」の存在を求める告白が見えている。

エマソンは右に引用した文章でもわかるように、自然界を構成する万物の奥に「神」の存在を求めるといふ思想と信仰

を抱えているのだが、おのれの「神」を求めて万物の奥へという思想の方向性は、無限への追求ということでもあった。こうして彼は、無限を求め、その無限が写象する世界のなかに住むことを望んだ。したがって、そのような世界においては、人間性の善だけを信じ、悪を否定した。この一種の汎神論的世界観にあつては、悪の存在は悪神（邪神）の存在を認めない限り、存在し得ない。そのために、人間の悪なる行為の根源にある原罪を認めるキリスト教を批判したのである。このようなエマソンの考え方は、ピューリタンからみれば、背教者の考え方であつた。

### 3 エマソンの思想における汎神論的要素

エマソンのキリスト教批判の背後にある彼独自の信仰と思想を見てきたわけだが、そこであらためて、エマソンの思想と東洋思想との関係を探ろうと思う。しかしその前提として、エマソンの自然に対する思想を考察しておこう。

エマソンは、その『自然論』のなかで、第一に自然の効用について述べている。それによると、彼の自然に対する思想を支える態度というべきものには、自然に対する信頼感と、自然を人間のために利用しようとするプラグマティックな態度がみられるのである。このようなところに、アメリカの思想家としてのエマソンの独自性が認められる。それと同時に、理想主義者エマソンにとつては、現象はあくまでも、現実世界の背後にある精神を暗示するものであつた。そして、これらが結びついたところに成立する彼の思想は、実は自然を直観して、それを歌うということであつた。そこに信仰者エマソンの姿がある。つまりそれは、自然界に内在する「神」（「大霊」）に対して祈りを捧げるといふことにほかならない。この点にこそ、エマソンにおける詩と宗教の一致がみられるのである。エマソンは、詩人をたんに修辭としての詩を作るだけの人間ではなくて、自然と語ることができる人間としてとらえた。

たとえば、彼は『自然論』のなかで、

詩人とは語る人であり、命名する人である。そして、美を代表する人である。詩人は君主であつて、中央に位置している。それというのは、世界は彩色されたものではなく、装飾されたものでもなく、当初から美しいものだからである。神がいくらかの美しいものをつくり給うたのではなくて、「美」が宇宙の創造者なのである。それゆえに、詩人は他者の許可を受けてなつた主権者ではなく、自分の権利によつてな

つた王者なのである。<sup>(8)</sup>

と書いている。エマソンによると、自然は外観的には雑多な様相を呈しているが、そこにはひとつの秩序がたらぬかれています。以上、自然は精神の象徴であり、また精神とは神の全知であるところからすれば、真であり、善であり、美であると考えられている。

さらに自然と人間の関係の思索において、エマソンは、人間は自然の一部分であると同時に、自然に対しては対等の存在であり、詩人であると同時に、道徳家、宗教家、哲學家、牧師、兵士でなければならぬとみなしている。しかし、現実の人間は、このようなエマソンの理想の人間からは遠く離れたものであることも彼は知っていた。そのために彼は、自己の信頼、すなわち、人間は誰も、彼自身の心の中の神を信じることによって、この矛盾は乗り越えられると主張して、人々を激励した。この自己の信頼（「自己信頼」と呼ぶ）は現実世界が仮想であることを悟るための出発点であって、ここに、彼の道徳的な行動への道が用意されることになる。このような自然と人間の関係の思索からすれば、彼を宗教家というよりも、道徳家と呼ぶほうが適當であるかもしれない。

エマソンの「自己信頼」は、現実の人間世界——それは自然と人間の関係世界といってもよい——と「神」の世界との間を結ぶための原動力であり、それこそがエマソンの楽天主義の核心であった。しかし、エマソンの思想をあまりにも楽天的だときめつけることはできない。彼は同じ『自然論』のなかで、

神との交渉というのは、神の心がわれわれの心のなかに流入してくることである。それは個人という川の水が生命の大海の満潮の前に退却することである。<sup>(9)</sup>

と書いているが、心の扉を開くと、神がそのなかに自然に「流入して」きて心を満たすと言ったときの、その楽天的な態度は、エマソンだけのものというよりも、むしろ当時のアメリカ社会全体が持っていた楽天的な態度でもあったといえるからである。それをエマソンはラディカルに、また狂信的に突き詰めることで、彼自身を神だとは言わなかったが、神に近いものだと自覚していたことは事実である。



したがって、エマソン思想を特色づけるとすれば、それは、このような思索にもとづいて、人間の神聖を主張したことであり、有限の人間を無限の人間に超出させようとしたと言つてよいだろう。あくまでも論理的思索を追求しながらも、その限界において直観へと突き抜けていく彼の思惟形式を論理的に理解しようとすることは不可能に近い。その点からすれば、エマソンの思想における自然と人間に対する思索は、たとえば、人格を否定する小乗仏教とか、仏教に刺激されて宋学を大成し、人間と物を対極の理と気の発現だとする朱子学とか、あるいは大乘仏教の密教や禪宗などに似ている。とりわけ、彼の思索の根底にある直観と深く結びついた神秘主義は、東洋的汎神論を秘めた真言・天台の密教の教理に似ている。このような汎神論こそがまさに彼の思想を特色づける最大のものであった。

ところで、エマソンが人間の神性を主張するためにとつた具体的な方法は、なんといつても、現実世界のすべての対立を解消して、美的といつてもよい秩序に統一することであつた。彼は出発点において、

幼稚な精神には、あらゆるものは個別的で、孤立している。やがて、その精神は、いかに二つのものが結びつくかを発見し、それらのなかに一つの同じ性質を認め、それから二つは三つになり、三つは三千になる。このようにして、精神は自分の統一しようという本能に圧倒されて、変則を減らし、地下を走る根を発見して、物を結んでゆく。この地下茎は互に相反するものや遠くにある両者を結びつけ、一つの幹から花を咲かせる。<sup>11)</sup>

と考へ、現実世界のすべてを統一しているところに、その端的な思想の原型性が認められる。混乱に秩序をもたらす「精神」こそが、彼の主張する「大霊」であつた。「大霊」は物の根源としてのみ直観されるものであるから、物の外形は幻にすぎないと主張するにもかかわらず、彼は幻である物の外形に無関心ではなかつた。アメリカのプラグマティズムの精神が彼の思想をつらぬいている。それがエマソンを東洋の仏教思想と分ける分岐点でもある。しかしエマソンにとっては、物は、接近しようとするほど遠のいてしまつて、永遠に接近できないものでなければならなかつた。それはなぜか。彼は、そのことを次のようなメタファーで暗示している。

星は一種の畏敬の念を呼びおこす。なぜならば、星はつねにそこにあるが、到達することができないからだ。<sup>12)</sup>

ここに見られる「星」は人間存在（あくまでも「大霊」から分出した人間存在であることを銘記しておくべきだろう）の比喩として、それに近づけないことに感謝している。そのために、エマソンは物の無限性を示すことで、物を賛美したかったのではないかというような誤解を招くおそれがある。しかし実は、物が実在しないということを、「到達することができない」という表現で示したのだと考えられる。そのことを『自然論』のなかでは、たとえば、

自然界の事実は、それぞれ、ある精神的事実の象徴であって、自然界に存在する個別の相はある精神的状态と関連していて、その精神的状态はそれを説明する絵として、自然界の相をみることによって認められる……。精神界の法則は、ほとんど、顔を鏡にうつすように物質界の法則と一致している。……自然はつねに、靈魂を物語っている。自然は絶対を暗示している。自然は永遠に存在する結果である。自然はわれわれの背後にある太陽をつねに指し示している大きな影である。<sup>[12]</sup>

と述べていることにも、その理解がうかがえる。エマソンは、理性の目で「物質界」を凝視すると有限世界は透明になって、「精神界の法則」(いわゆる「大霊」)その奥に姿を現わす(「自然はわれわれの背後にある太陽を……指し示している」と考えた。このエマソンの言う理性の目の凝視とは、超論理の神秘的直観である。そして、そう直観した瞬間に、エマソンは「自己信頼」の域を脱して、陶酔の境地に入ったと言える。このとき彼は、すべてを統一する「大霊」に合一した。すると彼の眼は、あらゆるものを素材(ギリシア哲学でいう「質料」)に変え、自分自身の世界の完成を凝視したのであった。

#### 4 北村透谷「内部生命論」との関係について

この節では北村透谷の思想との類似性に入ることにしよう。エマソンと透谷の二人に共通する宗教的環境(キリスト教者)からみると、その核心はいくまでもなく、神に対峙するかたちでの人間の魂(靈魂)にあるといつてよからう。エマソンはともかく、北村透谷にとって宗教的靈魂観は、それまでの前近代的、伝統的思維形式のうちに深く埋もれていた実体概念であった(ただし中世の仏教、神道では「魂へたましひ」は実体概念であった)。

まずエマソンにとって核心となる「大霊」の直観から述べることにする。  
彼は『自然論』のなかで、

私は一個の透明な眼球になる。私は無である。私にはすべてが洞察できる。私の内部を普遍者の流れがめぐる。私は今や神の欠くべからざる一部分である。<sup>13)</sup>

と語っている。エマソンが言うところの「大霊」とは、ここでは「普遍者の流れ」の別名で、この叙述は、彼が「大霊」と合一したという確信に立つて、自分の心の内部の声を聞いた結果を記したものである。この叙述によれば、エマソンは、自分の意識を創造主として、自然を全く新たに凝視する（「一箇の透明な眼球になる」）。すると自然は彼の意識の所産以外の何物でもない。そこに自然と人間の新たな共生共同体が構築されることになる。この考え方は、神中心主義のピューリタン体制に対して、人間中心主義の考え方であると言うことができる。すでに触れておいたように、自然を人間精神の象徴だと考えて、彼は観念的な「大霊」を中心とする体制（人間と自然の秩序）を作ったのであるが、しかし実は、すでにその出発点から、彼の敗北の原因がひそんでいた。

エマソンは、無限をあこがれる理想世界と、有限にとどまる現実世界という二つの世界を認めてはいたが、この二つの世界は妥協できないものだとして判断して、現実の物質に対する精神の象徴を重視し、それによって構築される世界体制から現実世界を切り捨てたのであった。現実世界を仮象とする認識がそれである。しかし、現実世界を仮象であると言っても、これを完全に無視してしまうことができなかったところに彼の矛盾があった。こうしてエマソンは、この二つの世界を対立させながら、精神主義者の立場で思想を展開したのだが、そのために、その思想は彼の信仰を裏切り、「大霊」を中心とする体制の一元性とははるかに介離するものとなってしまった。

彼は『随筆集・上』の『円環論』で、

自然に終りはない。すべて、終りは始まりである。真昼のうちに、次の夜明けが始まっている。……しかし、万物があずかっている、この不断の運動と進歩とは、もし、靈魂のなかにある不動とか安定とかの原理に比較されるのでなければ、けっして、われわれには感得され

なかったであろう。円環が永遠に生産しつづける間も、永遠の生産者は不動である。その中心生命はある程度まで、想像より優位にあり、知識や思想よりも上位にあって、すべての円環を含んでいる。<sup>15)</sup>

と書いて、彼の一元論の立場を強調した。エマソンの一元論によると、自然と人間は完全な調和と秩序を持っていて、この世のなかには、偶然は存在しない現象であり、この世は美しい必然の世界ということになる。彼が説く報償の精神も、自然と人間の調和と秩序を説明するものにほかならない。そして、この調和と秩序とは神の摂理と同じものである。しかし、この彼の一元論を、彼が切り捨てた現実社会にあてはめてみると、ただ精神的に差別を解消するといった程度の効果を持つにすぎない。

しかしエマソンは、この「完全な調和と秩序を持つ」自然と人間の創造主である「大霊」——それは個々の人間の内部にも分与されている——を信頼するところに、社会における自己の立脚点を見出した。それが前述の「自己信頼」である。エマソンは「自己信頼」の強さの程度に応じて、生活、宗教、教育、交際、財産などに革命を起こすことができると思え、その反対に、意志薄弱によっては、不平不満が生じるだけだと考えた。この「自己信頼」の教えに感動した人々は多かった。日本において彼の影響を受けた代表的な作家に北村透谷がいた。

……『爾自らを信ぜよ。』……これが即ち、爾が新しき国にありて、古るき国の古るき善をとりて、古き悪を棄て、以て新理想の新共和国を建設するを得る所以、斯く彼は教えたり。<sup>16)</sup>

と透谷は書いている。この『爾自らを信ぜよ』という言葉は、聖書を介して、実はエマソンの「自己信頼」の思想につながっていることを見逃してはなるまい。この点からいっても、北村透谷はとくに、エマソン思想の第二期の作品に心酔していたと考えられる。透谷の場合は、宇宙の「生命」に対し、人間の個人の「生命」に絶対性を見つめていた。この「生命」という透谷の用語が、エマソンの言う「靈魂」「普遍者」といった「大霊」の翻案語でもあることをみとめてよからう。「内部生命論」を引用してみよう。

造化は人間を支配す、然れども人間も亦た造化を支配す、人間の中に存する自由の精神は造化に黙従するを肯ぜざるなり。造化の権は大なり、然れども人間の自由も亦た大なり。<sup>16)</sup>

と言っている。透谷の考えでは、「造化の権」(宇宙の精神)がそのまま「人間の自由」(「人間の精神」)に置き換えられるということである。厳密に言うならば、宇宙の生命の一表現としての人間の「内部生命」、すなわち小宇宙としての人間の「内部生命」が、大なる宇宙と冥契し感応することによって、人間の「生命」は再創造される。そこに「人間の自由」が絶対肯定されて現れるというのである。ここにエマソンの言う「大霊」の思想の深い影響をみてとってよいだろう。右の言説に見える「人間の自由」とは、あくまでも自造のものでなく、他力を介在させて成立しうるものである。したがって透谷の言う「内部生命」とは、他力の助けによる人間の心の経験によってインスパイアドされ、再創造された「人間の精神」そのものを指すのである。

では、「瞬間の冥契」はどのような状態を指すのであろうか。「内部生命論」のなかで透谷は、「瞬間の冥契」を説明して次のように言う。

瞬間の冥契とは何ぞ、インスピレーション是なり、この瞬間の冥契ある者をインスパイアドされた詩人と云ふなり、(略)斯の如きインスピレーションを受けたる者を以て最醇最粹のものと信ぜんとするなり。(略)畢竟するにインスピレーションとは宇宙の精神即ち神なるものよりして、人間の精神即ち内部の生命なるものに対する一種の感応に過ぎざるなり。吾人の之を感じるは、電気の感応を感じるが如きなり。<sup>17)</sup>

ここでの「瞬間の冥契」という思想は、東洋の仏教的観念、すなわち禅や、禅定に関係する諸宗教の冥想、すなわち東洋的な思想(特にヒンズイズム)を媒体として、透谷のうちに形成されていた「直観」——天台では止観、真言では瑜伽、禅宗では禅(定)——ということであって、その直接的な思想的契機としては、いうまでもなくこれまで述べてきたエマソンの直観の影響が指摘できる。つまり、透谷の「内部生命論」はエマソンの世界認識と接点を持っているのであって、キリスト者として出発した二人は、東洋思想を借りて彼らの宗教観を説明しようと努力したということが指摘できよう。

透谷とエマソンが志向し、また到達した宗教的境地を説明することは難しいことである。それは、二人の持っていた宗教観が神秘主義に近いということも関係しているのだろう。キリスト教で満足を得られなかった二人のキリスト者が選んだのは東洋の宗教思想であった。しかし、一神教のキリスト教は彼らのキリスト教批判を許さなかった。そのために、透谷はキリスト教団体から追い出され、生活に困憊したし、エマソンはみずから名誉ある牧師の職を投げ捨てねばならなかった。

ここで問題なのは、最近の透谷研究もこの域を脱していないことである。キリスト者としての透谷研究は、異端者としての透谷を論じているにすぎない。そしてまた、エマソンとのつながりについてもあまり研究されていないのが実情である。その結果、二人の思想における核心が果たしてどこにあったのかということについては、まだ解明されていないというのが率直なところであろう。たとえば、透谷の「実世界」、「想世界」、「他界」、「内部生命」、「宮」等がそれぞれである。本稿の筆者はこれらのテーマがエマソンと東洋思想と関係を持っていると信じている。

確かに、二人の研究においてキリスト教は欠かせないものであると信じている。しかし、さまざまな角度からのアプローチによって、これまでの透谷とエマソンの思想の解釈に一步でも新たな意味が見出せるものと思うのである。

## 注

- (1) 拙稿「北村透谷と宗教——『内部生命論』の解釈に向けて——」(『文学研究論集』第十四号、筑波大学比較・理論文学会、一九九七年三月)
- (2) 一八三二年六月初、聖餐式の中で教会の委員会とエマソンは対立した。エマソンは聖餐式に葡萄酒やパンを使用することを中止して、記念式という精神的なものにしたいという提案を書面で第二教会に申し出たが、これを教会の委員会は六月二〇日拒絶することに決定した。これがエマソン辞任の直接原因になった。

- (3) Journals, February 10, 1830.

Is there not the sublime always in religion ? I go down to the vestry & I find a few plain men & women there come together not to eat or drink or get money or mirth but drawn by a great thought — come thither to conceive and form a connexion with an omniform Person. I thought it was sublime & not mean as others suppose.

(4) Ibid., August 21, 1837.

I believe that I shall some time cease to be an Individual, that the eternal tendency of the soul is to become Universal to animate the last extremities of organization.

(5) Ibid., June 2, 1832.

I have sometimes thought that in order to be a good minister it was necessary to leave the ministry. The profession is antiquated. In an altered age, we worship in the dead forms of our forefathers. Were not a Socratic paganism better than an effete superannuated Christianity?

(6) Ibid., July 6, 1832.

Here among the mountains the pinions of thought should be strong and one should see the errors of men from a calmer height of love & wisdom. .... Religion in the mind is not credulity & in the practice is not from. It is a life.

(7) Ibid., July 13, 1833.

The Universe is a more amazing puzzle than ever as you glance along this bewildering series of animated forms, — the hazy butterflies, the carved shells, the birds, beasts, insects, snakes, — & the upheaving principle of life everywhere incipient in the very rock aping organized forms. Not a form so grotesque, so savage, nor so beautiful but is an expression of some property inherent in man the observer, — an occult relation between the very scorpions and man. I feel the centipede in me — cayman, carp, eagle, & fox. I am moved by strange sympathies,

(8) Works, vol. III. Essays, Second Series, . 1. "The Poet."

The poet is the sayer, the namer, and represents beauty. He is a sovereign, and stands on the centre. For the world is not painted or adorned, but is form the beginning beautiful; and God has not made some beautiful things, but beauty is the creator of the universe. Therefore the poet is not any permissive potentate, but is emperor in his own right.

(9) Ibid., vol. III. Essays, First Series.

For this communication is an influx of the Divine mind into our mind. It is an ebb of the individual rivulet before the flowing

- surges of the sea of life.
- (10) Works, vol. 1. . "The American Scholar."
- To the young mind every thing is individual, stands by itself. By and by, it finds how to join two things and see in them one nature; then three thousand; and so, tyrannized over by its own unifying instinct, if goes on tying things together, diminishing anomalies, discovering roots running under ground whereby contrary and remote things cohere and flower out from one stem.
- (11) Ibid, vol. 1. . "Nature."
- The stars awaken a certain reverence, because though always present, they are inaccessible.
- (12) Ibid.
- (13) Ibid.
- I become a transparent eyeball; I am nothing; I see all; the currents of the Universal Being circulate through me; I am part or parcel of God.
- (14) Works, vol. II .Essays, First Series, . 10. "Circles."
- There is no end in nature, but every end is a beginning; that there is always another dawn risen on mid-noon, and under every deep a lower deep opens.
- (15) 北村透谷・エマルソン。明治・大正時代にエマソンの「自己信頼」に感化された日本の作者は多く、特に透谷はその代表者である。
- (16) 勝本清一郎編、透谷全集第二巻、岩波書店 1950、二三八頁
- (17) 注(15)同書、二四八頁